
二

神昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二

【Nコード】

N8980V

【作者名】

神昴

【あらすじ】

この学校の野球部を倒して・・・——甲子園へ。 個性的な人物達とともに、明らかに可笑しい夢を持った生徒達の学園青春恋愛ストーリー。 ……らしい。

プロローグ

何も知らなかったあの日……

「なあ。　そのオマエ。」

僕は一人の生徒と出会った。

「俺と一緒に……この学校の野球部を倒して、甲子園に行かねえか？」

その言葉は、とんでもなくワケが分からなかった。

「な？　素人の俺たちが野球部を倒して甲子園に行った。となるとすごくねえか？」

意味が分からなかった。

「ま、そういうわけだ。　一緒に頑張ろうぜ？　——野球。」

全く意味が分からなかった。

でも、その言葉の裏には……今の僕では、見えない世界が広がってる……。

「突然だが、宜しく頼むぜ……——相棒。」

その言葉と共に……僕の高校生活は始まったのだった……。

第一話

05月09日 月曜日 PM04:39

「今日も特にはなかったか…。残念だなあ。」

僕は独り言をつぶやきながらも自分の教室である1年5組から出て廊下を歩いている。

今年から、この白祁神城高等学校しらぎかみしろこうとうがっこうに入学したての一年生。

この学校の第一印象は名前がカッコイイ。

そして、学校なのに学園並の広さとデカさが売りで、生徒の数も中々多い。

1学年9クラスと言う体制で勉強や活動を行っている。

ちなみに校内の雰囲気は中々高校っぽい穏やかで面白い雰囲気である。

委員会や部活動も盛んで、生徒は多数が入部しており、放課後の時間を有意義に過ごしている。

しかし、特にこれと言って優秀な部活動がない…。頑張っているらしいけど。

ドキドキの4月の学校生活が過ぎ、季節は5月に入り、少々学校生活に慣れた所もあるが、多少慣れない所もある時期でもある。

そんな学校生活には必ず何かがある！…と、思いつつも何も起きない日々が続いている。

ちなみに5月の中間辺りに中間テストというイベントがあるものの、それは僕としては楽しい学校生活イベントではない！と、思っている。

それはそうだろうね…。普通。

さて、僕の名前は柚木 蒼。

この学校に通う一般的な学生だ。 所謂、普通の生徒。

髪は茶黒色の主人公スタイル。 ってアレ？ 主人公スタイルってなんだろう。

身長は一般的には低いと言われている165cm。

性格は、普通。 …… 普通？

… 楽しいことに興味があるし、巻き込まれたいけど、犯罪程度の危険なことには絶対手を出したくない。 いや、普通か…。

何を考えても僕には普通が一番似合うと自分でも思っている。

そんな僕にも一つだけ他の人とは違う、特殊な不思議な能力がある。でも、今は言えない。 そりゃ、後からのお楽しみってことで。

さてさて、話は長くなってしまったけれど…。僕は今、家に向かって下校中である。

まあ、普通の学生ってことは放課後は何もせず家へと帰るだろう。それと友達もそろそろ作らないといけないし、色々と高校1年生は大変だなあ…。

そんな考えを持ちながら僕は玄関へ到着し、靴を履き替え、外へ出た。

学校の玄関を出て数歩、歩いた所で…。

「なあ、そこのお前。」

ある一人の生徒に僕は声をかけられた。

「あ、はい？」

僕はすぐさまその声の方向を向く。

その生徒は上級生の様なオーラを放っている・・・いや、そんな雰囲気を感じる。

見た目は少し怖そうな感じではあるが、カッコイイ先輩だなあ、と思う。

髪の色は少し長く黒色で身長は175cm程度であろうか。

声は低くてカッコイイ喋り方だった。まあ、所謂、イケメン。

そんな人は次にこう話しかけて来た。

「俺と一緒に・・・——この学校の野球部を倒して、甲子園に行かねえか？」

…え、はい？

今、この人はなんて言いました？——野球部を倒して甲子園へ！？

「なあ、いい考えだろ？」

「…。」

突然すぎて僕には理解出来ず、その場から立ち去ろうとする。

もしかしたら、この話は自分ではなく、自分の後ろにいる人にでも話しているのだろう。

そんな考えで僕は勘違いをしながら立ち去ろうとするが…

「お、オイ！ ちょっと待ってくれよ！ お前に言っているんだよ！」

僕が立ち去ろうとしたのに気が付き、カッコイイ人が僕の肩を掴み話しかける。

「…え？」

「だからさ、俺と一緒に甲子園行こうぜ？ 野球しようぜ？」

…なんで、そうなるんだ！？ 初対面でしょ！？

僕は振り返り、真相を知る為に話しかけてみる。

「あの… どうして甲子園、いや野球をしようって言う話になるんですか！？」

「いやさ、甲子園に行ったらカッコイイじゃん。」

ええええええええええ！？

「…後さ、素人の俺たちが野球部を倒して甲子園に行った。となると凄いなと思わないか？」

なんでそんな勢いになるんですか！？

「…あれ？ 思わない？」

「思いませんね…。」

僕は楽しいことに巻き込まれるのは大歓迎なハズだが、これは少し度が過ぎてる。

素人が野球部を倒して、甲子園へ？ バカバカしい。

僕はその時に否定してしまった。 …残念なことに。

「…じゃあさ、お前は一体この学校に何を求めて入学したんだ？」

「——！！」

僕はその質問を聞いた時に思考働かなかった。確かに質問としては正しい。

でも・・・

「初対面の貴方には関係ないですよ！」

僕は否定してしまった。　これから特にすることも考えてないのに。

「…そうか。」

「では、そう言うワケで…。」

僕は立ち去ろうとするが、また一言声をかけてきた。

「今更だが、お前の名前を教えてくれ。」

「僕の名前は、ドーベル社長です。」

「…なんだか、凄く面白い名前だな・・・　ありがとうな。」

所謂イケメンの人は玄関へと姿を消した。

つてより、なんて嘘を吐いたんだよ、僕！！！！

そんなツツコミは自分にしか出来ない。　　つてか、あの人ツツコ

ミ派じゃなかったのか…。

そんなことを考えながらも家に向け歩こうとしたその時・・・

「おーい！　蒼ーっ！　待ってよー！」

玄関先から声が聞こえる。　僕はその声の主を知っていた。

「先に帰ろうとするなんて、ヒドいよー！　蒼ってばっ！」

「ごめん・・・　桃花。　先に帰ったのかと思ってたよ。」

「そんなワケないじゃん！　蒼と一緒に帰るのは私の仕事なの！」

「…えー。」

この声の主は僕の幼馴染みの桜咲さくらひなぎ 桃花ももか。

名前からして、とっても桃色な感じで可愛い。

髪の色は夢が叶って桃色のツインテールである。普通の学校じゃ色的に規制で怒られるけどね。

此処は二次元です、有難う御座いました的な勢いなので大丈夫らしい。

勿論僕と同じクラスで、10年間連続おめでとう！ って、言いたい位に毎度同じクラス。

身長は僕より低く154cmと4月に聞いた。 性格はこんな感じで明るい。

所謂ヒロインって所のポジションおめでとう御座います！ 桃花さん！

「…蒼？ 誰と話してるの？」

「気にしないで、うん。」

「ともあれ、さっきの人って誰なの？ 蒼？」

見られたのか、あの出来事。

「いや、よく分からない人だった。 急に野球とか甲子園とか話して来てさ。」

「野球部の人なの？」

「んー、違うと思うなあ。

ってより、野球部ならさっさと練習に行ってるハズだろ？」

「…確かに。 変な人だね。」

「なんで、変な人って分かったの！？」

「私の勘ね！ すごいと思わない！？」

「…いや、桃花は、毎度変な人って言うでしょ？」

「ありや、そーだったけ？」

そんな会話をしつつ、僕達は家へと徒歩で帰るのだった。
この学校から家までは10分程度なので、二人徒歩で通っている。
色々な話をしながら歩いて登校は毎年同じなのでもう慣れた。

ま、こんな風に何もなくして桃花と一緒に帰る学校生活もありかな。
…そんな風に僕は思っている。 あれ、好意？ んー、多分忘れ
た。

そんな感じで僕達は家へと向かって今日も歩いた。

05月10日 火曜日 AM08:02

僕と桃花との登校時である。

毎度、桃花がうちに来てくれてる。 ありがたい。

そんな感謝とともに一緒に学校へ今日も向かっているところだ。

「あ、蒼！ 今日数学の小テストがあるの知ってた？」

「…え。 知らなかった。」

「わーい、変な点数取ってしまえっ！」

「そ、そんなこと言うなよ！」

「あはは！！」

そんな学校の事に対しての会話は何時もの事だ。

よく、学校の事に対してのネタが思いつくなあ・・・ 桃花は。

「あ、蒼。 今日は昨日とは違う何かがあるといいねっ」

「確かにね。 あつたら毎日が楽しいのに…。」

僕はそう何時も思っているのだが、そんなことは一切起こらない。

やっぱり世界の法則なのかな…。 神様も平凡が一番って考えているのかな？

そんな考えを持ちながら、僕は学校へと到着した。

AM08:19

僕は玄関から自分達の教室がある4階へ向かう。

ってより、どうして1年生って今度は上からスタートなのだろうか…。

「蒼？ 疲れてるの？」

「いや、まあ…。」

「うわー、もうおじいさんなの？」

「…それも悪くないかも。」

そんな冗談混じりの会話をしつつ、僕は教室へ入った。

「よう！ おはよう！」

…のだが、そこには昨日話し掛けられた。 所謂イケメンの人がいた。

「…！？」

僕達は何も言えずただびっくりしていた。

しかも、所謂イケメンの人は僕の席に座っていた。

「なあ、騙すなんて酷いじゃないか。 柚木 蒼くん。」

僕の肩に手を置きながら話し掛けてきた。

「——!？」

僕は哑然としている。 いや、何故分かったんだ？ 僕の名前が!？
どうやら、昨日出会ったこの人は只者じゃないと．．． 今、気付
いた僕だった。

第二話

05月09日 火曜日 AM08:20

場所は僕の通う学校の1年5組の教室である。

目の前には所謂イケメンの人在る。

只者ではない・・・と、感じた僕はそこから話を進めることにした。

「…なんで、僕の名前を知っているんですか？」

所謂イケメンの人は冷静に普通に答える。

「そりゃ、一般的な感じで調べた。」

「…。」

「ま、ドーベル社長とかそんな名前のヤツなんて初めて聞いたし、

こんな学校にそんな生徒居ないと思ってただけだな…。

で、どうして俺を騙そうとしたんだ？」

僕は嘘を吐いたことには反省している。が、もうもう一つ考えてみる。

「僕は騙してません。実は僕はドーベル社長じゃなくて、ドーベル車掌なんです。」

何故か、桃花が啞然としていた。

「それでさ、お前に話があって来たんだが、話してもいいか？」

え、ちょ！？ スルーですか！！

「いや、話す。 …俺と一緒に野球しようぜ！ 甲子園行こうぜ！」

と、言うよりなんで僕なんだ？ 何故、僕なんだ・・・！？
それを見計らってか、桃花が所謂イケメンの人に話しかける。

「あの・・・ どういうことなんですか一体？」

うわ、率直過ぎる！！ だが、所謂イケメンの人は話し返す。

「お、君はマネージャーだな。 うん、それがいい。」

「え！？」

どーしてそうなる！？ マネージャーですと！？

この人は部活動か委員会でも始めるつもりですか！？

いや、アイドルの何かでも始めるつもりか！？

僕は突発的な発言に正論で言い返す。

「桃花は巻き込まないでください！！ 何も関係がないじゃないですか！！」

見事な正論が相手に突き刺さる・・・が。

「いや、普通に考えて女子マネージャーの方が何かといいだろ？」

見事な正論が男子が喜ぶ正論で返された！？

「だからよ、一緒にこの学校の野球部を倒して、甲子園に行こうぜ

L

またもその決めゼリフを言う。

何度も言うことにより、僕達を貶めるつもりなのか？

「だから、なんで甲子園なんですかつ？」

僕は少し怒った口調で言う。

「ま、理由は話せば長くなるが纏めると…… — カツコイイから。」

ええええええええええ！？

「あ、そろそろ時間か。そうだ、言い忘れてた。」

俺は2年7組の椎名しいな黒十郎こじゅうろう。

覚えておいてくれよ？

んじゃ、またな。

「

そうやって、振り返り手を振って教室を後にしたのだった。

僕は桃花に話しかける。

「…なんだか、理不尽な人だね。」

「でも、なんだかすごい考えたね…」

甲子園とか。」

僕もどうしてそこまで甲子園に拘るのが分からない。

そんな中、朝のHRの時間を知らせるチャイムが鳴る。

「あ、そろそろ席に着かなきゃね！」

桃花が急ぐが、僕の隣の席に座る。

ちなみに10年連続僕の隣の席だ。 おめでとう！ 奇跡におめでとう！

色々と不満が残るが、そんな感じで朝は過ぎて言った。

P M 12:20

4時間目の終了を知らせるチャイムが鳴り響いた。

勿論、この時間から昼食の少し長い休み時間。僕は疲れた体を起こし、お弁当を取り出した。

「おい！ 蒼くん！ 桃花ちゃん！」

と、知っている声が僕達を呼ぶ。

「あ、美鈴ー！」

彼女は僕達の近くに来て、早速昼食の準備に取り掛かった。

彼女の名前は柴崎^{しばさき} 美鈴^{みすず}。

僕達と一緒のクラスメイトで3年前、中学の頃からの友達だ。

身長は桃花と同じくらいで、性格は元気で明るい・・・ たまにうるさいが。

髪はショートカットで元気っ子ぶりを發揮している。

ちなみに美鈴は僕達の情報屋であり、昼食時は毎度毎度学校の話や色々な話で、

お世話になっている僕達の友達だ。 基本的にはこの3人で動いている。

「もー、お腹減っちゃってさ。 早く食べよー！」

美鈴が喋る中、僕達は机を動かす。

ちなみに僕達の席は一番後ろであり、学校生活の中で一番いい席を確保することが出来た。

くじ引きなのに、まさかの桃花と一緒に奇跡が続く…。 此处まで来るとスゴイ。

つてより、これは運命の席じゃないのか？ と、勘違いしてみる。すると美鈴が話しかけて来た。

「あ、今日何かあったー？」

「あったって…。 あー、あったと言えばあったね。」
「おお、あったのかー！」

僕は一つ考えた。 もしかしたら美鈴なら椎名さんの事を知っているのかもしれない。

僕はそう思い、話し返した。

「あ、美鈴は2年生の椎名 黒十郎って人知ってる？」

「知っているの何も、その人はこの学校の有名人だってば！」

「え？ 詳しく話を聞かせて!!」

桃花も興味があるのか話に参加する。

「まあ、椎名先輩は成績優秀で運動神経もいい、顔もカッコイイけど…。」

考えていることが変で残念なことしか考えない残念な有名人ね。

「

所謂、残念なイケメン。

「まー、でもそんな椎名先輩は人気あるからなあー。 何もしなければね。」

やっぱりか。

「でね、椎名先輩にはいくつか伝説があるの！」

「伝説！？」「

僕と桃花は驚く。

「まあ、話せば長くなるけどいい？」

「ああ、構わないよ。お願い！」

僕は椎名さんを知る為、美鈴の話詳しく聞かせて貰うことにした。

「まず、椎名先輩が入学早々に起こした事件の事を話すわね！」

入学早々！？ 椎名さんは一体何を考えているのか…。

「入学して、早々に考えたのは校内の窓を全て開けて廻ったらしいわ。」

…子供か？

「その後、先輩の友達と協力して窓を全て開けて喜んでいたわ。」

「ただ、下校時間終了の時に事務職員のおじさんが全ての窓を閉めて廻った…。」

「その行為に反発し、先輩達は事務職員のおじさんが閉めた窓を再度開けて廻り、」

「再度、全ての窓を開けることに成功したの。」

二度手間じゃんか、椎名さん。」

「…事務職員のおじさんは一度閉めればもう誰も居ないし、開けないし、安心していた。」

でも、実際は窓は事務職員室以外は開いていることに気づいていない。

その安心したのを見計らって、全ての窓が開いているワケなのだから、

開いている廊下や色々な所に先輩達は鼠花火を投げ込んだ。

すると、学校のセキュリティが異常を感知し、ブザーが鳴るわ、鳴るわ。

慌てて事務職員のおじさんもその場所に行った…。

それを見計らって椎名先輩は一人事務職員室に侵入し、

学校内のセキュリティを全て把握したらしいわ。
しかも、この事件は椎名先輩達だとまだバレてないのよ。」

只者じゃないと思っていたが、そんなことをしたのか…。

「さて、この話には続きがあつてね、数日後またも夜の学校に侵入するワケ。」

そして、次に考えたのは… 教室の教卓にある細工をしたの。

またも先輩の友達と一緒に正確に細工ををこなしていくの！
細工を全て終了させ、その場を立ち去っていく先輩達だった…。

で、何も知らない教師達は教卓に毎回朝のHR時には何か置くじゃない？

その瞬間に教卓が内側向かってに壊れるの。 教師は唾

然とするが、

全クラスが爆笑と困惑だったワケだけど・・・

「　　またもこの事件の犯人の椎名先輩とはバレてないの。」

「　　すごいな・・・よくそんなことを考えるのか。」

「　　つてより、なんてことを思いつくんだろ・・・　　椎名さん！」

「　　実際に何を考えているか、何がしたいのか周りにはよく分からない・・・」

「　　でも、そんな先輩でも何か考えがあるんじゃないの？」

「　　ちなみにまだ伝説はあるけど聞く？」

「　　いや、もういいや、お腹いっぱいだし。」

「　　・・・!?」

美鈴が驚く頃には僕と桃花は昼食を終えていた。そりゃ、あんなに真剣に話す美鈴はすごいよ・・・。

「　　もー、先に食べないでよー！」

「　　ごめんね。　　じゃ、今度は桃花が話すからね！」

と、そんな風に昼食は過ぎて行った。

僕は椎名さんの事を考えながら桃花の話聞くのだった。

「　　だけど、悪い人には見えないし・・・　　何かがあるに違いない。」

僕はそう思っていた。

PM04:42

僕は椎名さんの事を考えながらも玄関に向かっていた。

どうして、椎名さんはそんな悪いことだけでもそんなことを考えていたのだろう。

僕は下駄箱から靴を取り出し、靴を履き替え、玄関から出た。

「よう！ 柚木 蒼！」

声をかけたのは．．． やはり椎名 黒十郎だった。

「な！ 俺と一緒に野球をしようぜ！」
「．．．」

僕は色々なことを考えていたのか、全くその言葉には触れなかった。そして、僕は話し返した。

「椎名さんは．．． どうして、この学校に伝説なるものを作ったんですか？」

椎名さんは驚いた表情を見せるものの、話し返してきた。

「伝説ねえ。 はは、あれは楽しかったよ。」

「っと、お前は どうして そんなことを知っているんだ？」

「情報通の友達からちよつと聞きました。」

「ありゃ．．． その子をちよつと警戒しなきゃな．．．」

椎名さんは考えていた。

だけど、僕は話を進めてみた。

「椎名さんは．．． なんで危険なことばかりをするんですか!？」

「．．． ヤバイ、率直過ぎた!!」

だけど、椎名さんの顔は笑顔だった。そして、こう僕に告げた。

「そりゃ・・・——楽しいからに決まってる！」

その言葉は爽快に颯爽と僕の心に響いた
普通の言葉じゃないか？　こんな言葉。でも、僕には響いてしま
ったのだった。

第三話

05月09日 火曜日 PM04:45

「そりゃ・・・——楽しいからに決まってるだろ！」

「…楽しいことは絶対に自分達で起こさなければ何も起きない。
普通に考えれば当たり前なのかもしれない。」

高校生にもなってそんなことを考える俺は馬鹿なのかもしれない。

でもよ、そんなことを考えて実行しなきゃ楽しい学校生活は送れない。」

言っていることは正しい・・・と、言うより僕の心に響く。

「…また、自分達が楽しいことをすれば自然と俺に興味をひいてくれる人もいるだろ？」

アイツの近くにいれば何か絶対に起きる。そう言うヤツになりたいんだ、俺は…」

僕は、その言葉の裏には何があるのかが気になっていた。

「だから！俺は自分のしたいことをする。そして、仲間を作る。

その仲間とともに・・・野球をしたいんだよ。…俺は。」

…あれ、可笑しくなってきたぞ？ どうして、野球？

サッカー、バスケットボール、バレーボールじゃダメなのか？

あ、甲子園ってヤツか…。

でも、僕はこんな展開を望んでいたんじゃないのか？

いいのか？ 此处で素直にならなくて…？ 僕も考える。

だが、沈黙を破ったのは椎名さんだった。

「——お前が必要なんだ！！」

その言葉を言われた時・・・何も言い返すことが出来なかった。

「…って、言えば大体いいのかなー？ と。」

「プツ・・・ハハハ！！！」

「！？」

僕は訳が分からず笑っていた。正直、僕はこんな展開を望んでいたからだ。

「んじゃ、お前は決まりだな。…宜しくな、相棒。いや、蒼」

なんたる、いきなり名前で呼ばれるって…。…ってか、相棒ってなんだ！？

そんなワケで僕はこの人について行くことにした。

P M 0 4 : 5 0

「あ、椎名さん。」

「いや、黒くろでいい。」

「…え？」

「俺の呼び方だよ。黒十郎じゅうろうって長いだろ？」

「あ、分かりました…。黒さ…。」

「黒で十分だ。　　さんなんていらねえよ。　　それに今後仲良くす

る仲だろ？

もっさ、敬語とか止めろ！ 俺はそう言う敬語とか苦手だからさ…。」

黒さん… いや、黒はやっぱ不思議な人だ。如何して急に仲良くしてくれたのだろうか？

それより、黒は野球経験があるのか…？

「黒は野球経験あるの？」

「いや、したことない。 だが、ポジションはショートがいいな、俺は。」

…え？ 普通なら野球する人ってのはピッチャーを選ぶんじゃないのか！？

「ショートってカッコよくねえか！？ な？ 蒼！」

「えええええ！？」

またカッコイって理由だけらしい。

「で、お前がセカンドな！」

「え！？」

僕のポジションが勝手に決まる。

「じゃ、これで野球が出来るな！」

「——！？」

今、なんと言ったのか僕には判断出来る。

「あの…？ 黒？」

「ああん？ 如何した？」

僕は恐る恐る聞いてみる。

「野球は9人でするものだね？」

「…そうだが？」

「じゃ、僕達を除く他の7人は何をするの？」

「セカンドとショートはポジションにつくよな？ その後他の7人は…。」

「…他の7人は？」

黒は一つ息を置き… 勢いよく話しかけて来た。

「まず1人目は、ファースト…。」

「そうだ、ファーストだ！」

「…スターレボリューションだ。」

「——ファースターレボリューションッ！？」

「どうやら黒の中では必殺技的なポジションらしい。」

「続けて2人目は、サード…。」

「そうだ、サードだ！」

「…ティーワンだ。」

——31ツ!?

どうやら黒の中では数字的なポジションらしい。

サイドが31人も居たらビックリするわなあ・・・バッターとか。

「続けて3人目は、レ・・・」

そうだ、レフトだ!

「…フトンだ。」

——レフトンツ!?

あれやだ可愛い。黒の中ではそんなポジションらしい、

『あ、じゃあ私レフトンね?』 ……あらやだ可愛い。

「続けて4人目は・・・」

ん? 次はセンターか?

「をだな。」

——を…?

え、どうしたの? 黒!?

「続けて5人目は、Lightだな」

と、言うか・・・よく考えたけどこの7人は野球のポジションで何をやるのだろうか？

勝ち誇った顔で僕を見る。僕は再び聞いてみる。

「…で、その7人は何をするの？」

「いや、だから、今言ったじゃないか！」

「え……!？」

「俺達2人を除く、他の7人が野球を左右すると言ってもいい…ッ
！」

「ええええええええ！？」

どうやら、黒には黒の世界の野球があるらしい。

ちなみに黒の世界専用野球のルール説明は面倒なので今度にも…。

さて、こんな具合で僕達は野球をしようとしているのだが、

本当に甲子園なんて行けるのか心配で仕方がなかった。

「いや、断言する。今じゃ、かなり無理で不安だ。」

第四話

05月09日 火曜日 PM05:08

場所は学校の玄関近くの階段付近である。

公園にあるような感じの階段を思い浮かべて欲しい。

その場所で僕、ゆずき柚木 あおい蒼と、

一つ上の先輩のしいな椎名 くろじゅうろう黒十郎 通称：黒 は話を続けていた。

先程黒に野球経験は？ と、聞き、やったことはないと言われた。

それに野球と言うスポーツを黒自信は野球に対して何か勘違いしている模様である。

そんな中、僕と黒との会話は続いていた。

「…で、黒。」

「どうした？ 蒼？」

「いやさ、野球出来るよね？」

「ああ。今の所、シヨートだけなら任せておけ！ 後は無理だ！」

何故、シヨートだけなのだろうか？ やっぱりカッコイイと言う理由らしい。

今の状況では、自分でも不安しか浮かばない。 そんな中、黒は話しかけてくる。

「早速キャッチボールからでも始めてみようぜ？」

「うん！」

その言葉を言ったのはいいのだが、グローブと球が見つからない。

「ねえ、黒？」

「どうした？」

僕は黒に考えさせることにした。

「野球に大切な物って何だと思う？」

黒は何故か少し悩み・・・言い返してきた。

「...やる気だろ？」

かなり真面目な表情で言われた。
そんな真面目な顔で言われたので、どうしようも返答できない。

「いや、でももっと大切な物だよ！」

気づかせる為に強調して言ってみる。
ってより、成績優秀ならすぐに分かるハズなんだけど...？

「...人数か？」

「んー、惜しいのかよく分からないけど・・・今の段階じゃ、違うね。」

人数は後々必要だけど、今はそこじゃないから！
僕は諦めて、正解を言う。

「...グローブと球だよ、黒っ」

僕は飽きた表情で言ってみたが・・・

「いや、グローブと球は野球部から盗もうぜ？」

「ちょー！何を言ってるんだよ！そんなことしたら大変なことに

なるからっ!!」

「だが、待て。俺は校内のセキュリティを全て把握しているんだぜ？」

部室の鍵程度簡単に事務職員室から盗んで来ることは容易いが？」

「…え、じゃ、その為にセキュリティを把握したの!？」

「ああ… — そうかもな。」

「ええええええ!？」

黒はこうなることを知っていてやったのか？ いや、そんなハズないだろ。

「いや、まあ、嘘だけど。」

やっぱり、色々な成り行きで、だろう…。

「…まあ、俺は盗んで来るヤツじゃないし、安心しろ。」

全ては計画にそって進めてる。だから、大丈夫だ。」

と、そんな所に一人の大きな体の男が近づいてきた…。

「よお！ 黒!」

「おう。 銀二!」

銀二…？ なんだか、とんでもない名前だ。

「その小さい1年生は一体誰だ？」

「小さいって！ いや、これでも平均的ですからね!」

だが、体格の差はかなりある為、反論したのが怖い。
僕から確認出来ることは、デカイ生徒は身長が187cm程度あり
そうだ。

いや、190cmでもありそうな巨体な男である。そして、筋肉
がすごい。

「ああ、そいつは柚木 蒼って名前で、俺の相棒だ。」
「……!？」

デカイ男はそのまま固まっている。

「ありや、いやさ……野球のな！ 普段の相棒って言えばお前と
アイツだけだろ！」

「おおっと、そうだったな！ 俺達2人を除いて、お前が相棒作る
ハズねエーよな!!」

だが、デカイ男はある単語に気がつく。

「……って、ああん!? 野球!？」

デカイ男は野球と言う言葉に少し戸惑っていた。

「って、お前……まさか野球始めるつもりか!？」

「ああ。そうだが？」

「ブツ……ハハハハハハ!!!!!!」

デカイ男はかなりうるさく笑いだした。

「な、なんだよ!？」

「お前が野球！？　バカにしてんじゃねエーぞ、ハハハハハハ！！」

「うるさい…。　野球がしたかったんだよ。　それだけだ！」

野球をする、実際の理由としては、カツコイイから。

「実はお前もやりたいんじゃないのか？　銀二？」

「…ま、お前がやるってんならオレも混ぜてくれや！！」

「馬路か！？　ありがとな！　流石、俺の相棒ってヤツだぜ！」

どうやら黒は相棒という言葉をよく使う為、簡単にすぐに口にしてしまうらしい。

「…あ、そうだった。　蒼。　コイツは俺の相棒で親友の…。」

相棒も親友も纏めて言った！？

みちなか
「道中　銀二って言うヤツだ。」

「…最初はビックリしちまったが…。　今日から宜しくな？　蒼
！」

「あ、はい！」

「敬語とか別にいいから、ってか落ち着かねエんだよ、気軽に銀二
って呼んでくれ。」

みちなか
道中　銀二は黒の親友でクラスも同じ2年7組である。
身長はデカイ。　性格は悪い人ではなさそうだ。

…今更なんだが、銀二は肩に大きな段ボールを抱えていた。

「…で、銀二。　例の物は…。　っと、肩にあったか。

なんだか、お前の一部だと思って分からなかったよ。」

「そんなにオレに大きな荷物は似合うのか？ …まあ、いいや。」

銀二は肩に担いでいた段ボールを地面に降ろす。
ちなみに銀二は中身が何なのか知ってはいない。

「蒼．．．——これが野球にとって大切な物だ…！！」

黒は地面にある段ボールを勢いよく開けた。

「にゃー」

「「「。」「」」

とつても可愛らしい声で鳴いている。

「にゃー？」

その段ボールの中にいたのは一匹の猫だった。

「…可笑しいな。 もう一度段ボールを閉じるぞ？ いいか？」

少し黒が焦りながら確認を僕と銀二にとる。

黒は勢いよく段ボールを閉じる。

「蒼。——これが野球にとって大切な．．．」

「にゃー。」

段ボールからは猫の鳴き声。 まだ開いていないのに…。

「「「。」「」」

僕と銀二は哑然とする。と、黒が突如銀二に掴みかかる！！

「銀二！！ これはどういうことだ！？」

「い、いや、オレだって知らねエーよ！！」

黒が言うヤツから受け取ったのがこれなんだからさ！！」

「そ、そうか…。」

黒は少しへこんでいた。

あんなにカツコよく決めたつもりが、中身が思っていた物じゃなかった。

思っていた物と言うと・・・多分、グローブと球、またはバットなどのことだろう。

「でも、銀二なんで猫って気づかなかったの？」

「ああ、持ってみればそれっぽい重さだし・・・」

僕はその段ボールを持ってみるが、それっぽい重さだと実感出来た。

「…だけど、途中でにゃーにゃー鳴いてたんだが・・・」

黒が銀二に向かって、勢いよく走りだす。

「気のせいだと思ってそのまま・・・ぶっ！！！！！！」

黒のジャンピングハイキックが銀二の顔に直撃する！

銀二が50cm動いた。 たったそれだけ…。

「テ、テメエエエエエ！！ 痛エじゃねエかああああ！！！！」

勿論、銀二もリアクションをするが。

「なんでお前はそこで、違う物だと気づかなかったんだ!？」

「いやだから、それっぽい重さだったからさ!!」

「そこじゃない! その後のにゃーにゃー鳴いてる所で違う物だと気づけよ!!」

「いや... すまん。ガチで気のせいだと思ってた...」

銀二もワザとじゃないアピールをする。仕方なく、黒は落ち着く。そして、学校へ目をやる...

「犯人探した。二人とも環境整備委員会へ殴り込みだ!!」

俺達の求めている物を奪いに行くぞ。準備はいいな? ——
よし、行くぜツ!!」

そんなワケでこの段ボール事件を解決に僕達は環境整備委員会へと殴り込み?

…の様な形で勢いよく玄関を駆け抜け、環境整備委員会へと目指した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8980v/>

二

2011年10月9日13時33分発行